

令和7年1月30日

SNAプロジェクト：シリーズ「強度行動障がいと私」

約40年間、行動障がい支援等に関与して、
感じたこと、伝えたいこと。

相談支援事業所 サンクスシェア

相談支援専門員 倉光高潔

私について

- 最重度知的障がいの妹の兄。後に白内障で視力を失いました。
- 妹は今は入所施設で温かい見守りを受けて生活しています。
- 行動障がいへの関心の伏線として：
- 情緒不安や不眠、年齢を理由に児童入所施設を出され精神病院に長期入院。辛かったのは病院看護師からの訴え（トイレに服を突っ込むので困るんです。）と処方された強い薬。行政担当者の親への説明（良い施設が見つかったら知らせますね）、病院面会時の他患者（自傷）の親子の光景。入所施設から（もっと薬を増やしてもらわないと困ります）
- 後にすばる園の支援を受け長いお試し期の学び等を経てリセットへ。

職歴

昭和59年 社団法人九州子ども発達研究センター入職。療育業務。療育キャンプ等。南九州センター
(昭和63年 野口幸弘先生が筑波大学を辞めて研究主幹として着任される)
(平成4年 大野城すばる園に改称。野口先生が理事長・園長に就任) 総務。

平成5年 一時離職 (平成6年 食品加工会社勤務 (3ヶ月))

平成7年 社団法人大野城すばる園復職。

H7 : **援護就労担当** (鳥栖アーモンド工場) 約5年 エンクレーブモデル

H11 : **グループホーム担当** (療育支援のあるGH) 約5年

H13 : 志免町子育て支援課 **障がい児保育巡回指導員**受託 (町内6園) 加配保育士・保育園へのSV

H14 : 福岡YMCA国際ホテル・福祉専門学校保育科非常勤講師 (家族援助論)

H15 : **事務長** 兼務

H16 : 志免町健康課 母と子の心の健康相談員受託 / 清算人

平成17年 社会福祉法人福岡障害者支援センター入職 (グループホーム担当)

H17.4 : **福岡市知的障害者地域生活支援センター** 専任コーディネーター

H25.4 くれぱす (生活介護) 異動 生活支援員

H28.4 ? 中央区障がい者基幹相談支援センター 専任コーディネーター 定年を迎える。

R3.4 くれふる (生活介護) 異動 生活支援員

令和4年 合同会社サンクスシェア入職。相談支援専門員。現在に至る。

思い出に残る職務①

援護就労担当（鳥栖アーモンド工場）

5年間

- 行動問題も多いメンバー数名と一緒に工場ラインの一つの工程を任される。
- 一般のパートさんたちと一緒に作業。
- 利用者の突飛な行動。最初は非難を浴びるも理解へつながる。
- 仕事と通訳を通じ信頼築き忘年会に呼ばれる。
- 行動問題あっても受入れられた先例。

思い出に残る職務②

グループホーム担当（療育支援のあるGH）

5年間

- まだまだグループホームがほとんど無かった時代。
- あっても一般就労できる程度の軽度の方が中心だった頃に、行動問題がたくさんある方が生活するグループホームの取り組み。
- 世話人と称していたが、今でいえば、生活支援員兼世話人兼管理者。
- 入居者は皆何らかの大変な行動問題あり。一つ一つ丁寧に療育していくなかで改善に向かう。
- 行動面で重い障害がある方のグループホームの先例となる。

思い出に残る職務③

志免町障がい児保育巡回指導員 4年間

- 町立5園、私立1園の巡回。
- 統合保育で各園に在籍する障がい児（疑い含む）支援について配置された加配保育士個別、園全体の保育士さん方への助言等。
- 午前観察、午後助言ミーティング等。
- 別途、加配保育士向け勉強会。実践報告会開催など。
- 行動問題が固着する前の子ども、行動問題が起きるメカニズム、観察のポイントや支援の組み立てや配慮点等を確認。⇒素直な実践でドラマチックに問題改善し、やりがいマックス。
- しかし、小学校進学後、崩れたとの報告にがっかり。

行動障がい支援に関して 私が影響を受けたもの

- 「大野城すばる園」という特異な組織
- 「野口幸弘先生」という尊敬する上司（師匠）
- “子どもの側に立つ”理念

応用行動分析などの知識技術等は諸研修があるためここでは触れません。その知識技術以前に私たちはどう考えて何を目指すべきか等を考えてもらえたら。

まず、おことわり

- これからお話しする情報について、私の記憶に残る過去の数々の事象とそれに関わる私の個人的な解釈等をあげさせていただきます。
- 内容詳細について、出来事等の史実や時系列の誤認や混同等がある可能性があります。（情報収集・ファクトチェック不足）
- 取り上げた野口先生のご発言内容、必ずしも正確な文言とは異なる場合があります、また、ご真意と私の解釈のズレ、時代背景等の変遷により現在にそのままあてはめることができない点なども多々あります。
- もし事実誤認やご真意に反した内容等があれば、すべて私の認識の誤りであり私の責任です。その旨を予めご了解ください。

社団法人大野城すばる園について

- 昭和56年：小児科等の医療関係者や保育関係者らにより自閉症児療育の学際的研究機関九州子どもセンターとして発足。
- 昭和58年：社団法人九州子ども発達研究センター許可。大野城市に拠点に、全国から200名を超える登録者が利用。

療育キャンプ年数回、標準週1日の拠点での療育と親の勉強会。

研修行事開催や国際交流等も行う。

⇒私は親と専門家とともに共同して運営する点に魅力を感じていた。同じ病の子をもつ親同士、悩みを語り合い助言し合うピアカウンセリング的機能は癒しを与え大きな役割を果たした一方で、採用されていた療育への疑問と行き詰まりを感じるようになりました。（〇〇療法、〇〇アプローチ）⇒思えば恐怖だったかも。

大野城すばる園全景



知的障がいを中心に幼児から成人までを対象に主にその親たちが中心となって運営する組織。公費を受けない分、自由な活動ができる反面、経営は厳しい。療育だけにとどまらず社会的視点をもって賛同者の応援を得て、研修や啓発活動等の諸活動を積極的に行った。強度行動障がいの状態にある人をできるだけ受け入れて支援してきた。

強度行動障がい支援の連泊支援等の舞台
解散後、筑紫会を経て
現在は取り壊されて一般住宅となっています

野口幸弘先生について

Wikipediaより引用 倉光一部編集

• **野口 幸弘**（のぐち ゆきひろ、1935年-）は、西南学院大学人間科学部社会福祉学科元教授。元人間科学部学部長。大学院人間科学研究科非常勤講師。教育学修士、LD教育士スーパーバイザー。福岡市保健福祉審議会障がい者保健福祉専門分科会委員。福岡市強度行動障がい者支援調査研究会座長。福岡市障がい者等地域生活支援協議会会長として福岡市の強度行動障がい者集中支援事業を実施する拠点「障がい者地域生活・行動支援センターか〜む」の開設、運営に尽力した。

• 経歴

• 筑波大学大学院修士課程（教育学修士）修了、筑波大学大学院博士課程単位取得退学、筑波大学技官

• **1988年：九州子ども発達研究センター入職**

• **1992年：大野城すばる園園長**

• **2000年：おおほり苑施設長**

• 2019年3月：西南学院大学を退職

• 2019年6月14日：社会福祉法人福岡障害者支援センター理事長

• 主な著作

• 長畑正道・小林重雄・野口幸弘・園山繁樹(編著) 2000 行動障害の理解と援助 コレール社

• 小林重雄・園山繁樹・野口幸弘(編著) 2003 自閉性障害の理解と援助 コレール社

• **講演録：子どもの側に立つ1～6（大野城すばる園）※倉光加筆**

• 斎藤美麿・野口幸弘・青木邦男(編著) 2009 発達障害の理解と支援 ふくろう出版

• E.エマーソン・S.L.アインフェルド(著) 園山繁樹・野口幸弘(監訳) 2022 チャレンジング行動 一強度行動障害を深く理解するために 二瓶社



野口先生着任から始まった変革

(注：あくまで倉光の解釈で推測も含みます)

- 野口先生は、入職されてからの印象を“大学での研究現場と支援現場の実践の大きな隔絶。提供されている療育の実態に愕然とした。”(のちの述懐より趣意)
 - 療育もさることながらクリニックベースでは日々生活で疲弊する本人家族者にとって、ほとんど助けにならない。
 - 子どもと家族が一番困っていることを受け止める支援が必要。
⇒大変なケースは生活丸ごと受け止めて親と同じ苦しみから出発していく。何よりも情緒の安定をはかる。山歩き等。行動問題を起こさないですむ支援の模索。
- 学習態度が整ってきた子どもには職業前訓練等、社会生活に役立つ技能の習得等のプログラムを積極的に。

大事にしたこと 生活支援の視点

- 発端：不眠や徘徊、著しく混乱した言動を呈する知的障がい女性Mさんの荒れた生活と疲弊された両親の姿。
- 24時間の生活をともにし全面受容（本人からの安心と信頼を取り戻す）から。親の本当の苦しみを同苦することからの開始を決意。親と同じ立場で一緒に悩み良い支援を模索し穏やかに過ごせる環境や支援を考えていく。行動理論に依拠しつつも特定の療法にこだわらず良いものはなんでも参考にしていく姿勢。

⇒安心感を取り戻すことは容易でなく即効性もありませんでしたが、親と同じ立場に立つ支援は親との絶大な信頼につながった。以後、数年にわたる支援はGHへの入居へ進み、支離滅裂な話も意を汲んだ応答で穏やかな生活へと変化していきました。

支援者の姿勢（究極の葛藤・鍛え体験）

- 行動障がいとは社会の一般常識や偏見や誤解の影響、加えて、関わる大人たちのエゴや保身の犠牲で生み出された可能性もある。
- 「子どもの側に立つ」を追求する姿勢で支援者は追い詰められることがあった。
- 例えば職員間の論争。できるだけ無難な方向の議論となりがち。
- 例えば「一人のために特別な配慮はできないから対応は無理」「安定剤調整のため入院治療したほうが良いんじゃないか？」「この子一人のためにこの施設（学校）があるんじゃない」など、もっともらしい理由に落ち着こうとする。

易きに流れゆく意見に傾くと

「あらゆる可能性を検討し尽くした結論なのか？」

「我が身（支援者）が大切か？ 本人（家族）が大切か？」

⇒年齢や役職は子どもの支援を考えるうえで関係ない。

子どもの為ならお互いに罵り合って良い。

子どもの側に立ち、考え、行動するひとが一番偉い。

安易に楽を選ぶのか、子どもの側に立って挑むのか、どちらを取るのか？

引き受けるのか逃げるのか？ 踏み絵を迫られることが3回以上。

⇒都度、職員は話し合い、覚悟をもって引き受けることを選びました。

先生の並々ならぬ覚悟。絶対に良くなるという確信。子の最善の利益の追求。

⇒まさに**ソーシャルワーカー倫理綱領の精神**。

皆が子どもの側に立って考えることができれば最善のアクションへつながる。

多少の意見の相違も乗り越えられるはず。との信念につながる。

子どもの側に立つため、謙虚に学ぶことの重要性

- 最善の支援であるかどうかの自問自答
- 最善を尽くさないのは利用者に失礼なこと。

⇒現在、行動障がい支援者研修で**効果が期待できると推奨されている応用行動分析等の知見を学ばないのは最善を尽くしているとは言えない。**

※ちなみにサンクスシェアの行動目標の第一番は「**素直さ**」

⇒それぞれが完璧でないことを自覚し**責め合うのではなく互いに何でも善意の指摘**をし合い、**当事者中心視点で謙虚に受け止められることを支援者の大切な資質として掲げて**います。大いに賛同するものです。

集中ケア + 支援者研修

- 行動障がいが著しく激しいケース。藁をもすがる思いで頼ってこられるケース。受け入れる私たちも一瞬ひるみそうな激しい行動問題。
- 24時間、数日間連泊での受け入れでの特別プログラムを企画提案。すばる園職員だけでなく他機関支援者との合同研修も。
- 支援計画や費用面等について保護者了解のもとで実施。
- 昼夜分かたず日中活動や生活場面をとおして連続して徹底的に記録をとりアセスメント。
- 毎夜のカンファレンス。⇒翌朝までに支援プログラムや支援方法等の修正と準備を終える。
- PDCAの繰り返し。⇒最終日に報告会。以後の支援の提案。
- 他利用者の了解を得て予定療育日程を調整休止して実施することもあった。
※ムーヴオンセミナーなど

社会啓発活動

- 全国で活躍する研究者・実践家、行政担当者等を招いての勉強会やセミナー・シンポジウム等をたくさん主催。

例：映画「しがらきから吹いてくる風」（西山正啓監督）

上映フォーラム／かしわてつ・小室等コンサート／

浅野史郎氏講演、シンポジウム等など。

⇒親御さんたちは、日々の療育利用時の野口先生の勉強会で、子育てや療育の基礎、先進研究などを学ばれていましたが、このようなイベント参画を通じ、**わが子の深刻な問題がわが子だけの問題じゃなく社会的に大事なことに気付き、後に頼ってこられた困難な事例の支援の際には物心共に全面協力**いただきました。

このように社会的視点の活動に関与したことは幸せな経験でした。

特異な組織、大野城すばる園の経営

- 福岡県知事許可の社団法人（当時の民法34条根拠）会員有志の運営組織。
- 後年、年長者を中心に、のちに“こすも舎”（現在の生活介護くれふるの前身）が独立。
- 収入：正会員会費、賛助会費、寄付金、療育利用料。（公費収入無し）
正会員会費：年1万2千円。賛助会費1口3千円。
療育利用料：1日（10～15時）6千円。
※サービスはほぼ個別療育。全員にIEP（個別教育計画）作成。
年長者の希望者：週5日の日中支援と4泊5日GH利用 年200万円。
- 支出：8割近くが人件費。正規職員常勤6～7名。（途中からこすも舎が独立へ）
職員待遇：今でいえばブラック。野口先生も。皆が手弁当。
泊まり手当は当初1泊2千円。後に4千円へ（公費無しの頃）
でも、そのお金は親御さんたちからの直接のお金。重みを直に実感。
- 貸借：資産は寄付と銀行借り入れで建設した土地建物。解散時資産価値は約9千万円。
野口先生理事長・園長就任時の負債、銀行借入残6千万円。
⇒存続させたい会員と支援者が全力で応援して数年で全額完済。

すばる園の経営悪化⇒解散へ

- 利用者の各自治体での福祉サービスが普及しはじめ、会員は次々に各地域のサービスへ順次移行。（**学びをもとに各地の親の会の中心者へ**）
- 残る方は地域で受け入れ先のない特別なニーズを抱えた方。マンツーマンや2人介助の手厚い支援や個別環境を整える配慮も必要。
 - ⇒ 運営コスト上昇に比して支える会員が少なくなる。
 - ⇒ 大野城すばる園の社会的な存在意義をつなぐべく、みんなで寄付金集めをしますがついに行き詰まり、臨時社員総会にて解散が決議され、療育事業を筑紫会、グループホーム事業を福岡障害者支援センターへ譲渡。2004年末をもち解散となりました。
- ちなみに最終年度年間予算規模は約3千万円でした。解散時の負債なし。
- **もし、当時クラウドファンディングがあったら、事業継続できたかも。**
 - ⇒ この経験が私の社会課題と福祉事業についての問題意識に繋がります。

社会福祉法人福岡障害者支援センターでの仕事

- すばる園から事業譲渡されたグループホーム責任者を経て、新設間もない**福岡市知的障がい者地域生活支援センター専任コーディネーター**を拝命。
- **現かーむ所長の森口氏のもと**で福岡市内の知的障がいがある本人ご家族の相談支援に携わり、**行動障がいの問題を抱えたいくつもの事例**に出会いました。
- 既存サービスでは対応できない部分をご家族の物心共の深い理解と協力ののもと、本人が安心できる環境の居場所の整備、有能なボランティア有志を募集しての24時間の支援体制の調整、学校の先生方のご協力をいただくなど、山あり谷ありの試行錯誤でしたが、それぞれに概ね改善に向かい、多くの事例で今では安定した生活ができています。
- すばる園で経験した型にはまらないノウハウ等が生かされました。
- また、**この時にボランティア等でご協力いただいた方々の多くが現在の福岡市の行動障がい支援の中核として大活躍されています。**このような支援の学びがいかに大切だったか。です。

印象に残った行動障がい支援事例について

- ①中学生のKくん、自在に嘔吐と嘔吐物や排泄物投げ。
- ②一日を睡眠8H、食事8H、トイレ8Hで終わってしまうHさん。
- ③洗剤への異常なこだわりから警察沙汰の近隣トラブルを繰り返す、指示や活動に応じず、思うようにならないと激しい自傷他害を示すIさん。（ボクのスケジュールがほしい）
- ④生理的不快や見通しが分からない等の混乱で激しい噛みつきや引っ掻き行為となるNさん。
- ⑤人が大好き。無視されたり別れの悲しみに耐えられず、都度大きなかんしゃく。激しい他害や破壊行動を起こすYさん。
- ⑥破壊他害が激しく家族との生活ができなくなったKさん。
- ⑦いじめをきっかけに引きこもり、訪問支援者との関係悪化で生死を彷徨うまでの強度の拒食状態となったTさん。 他、多数。

読んでください

「生まれながらに行動障がいがある人は居ない。周囲の環境や人に対する不信感や不安感等の結果習得されてしまったもので、二次障害であり予防可能であった可能性がある。本人の障がいのみに責を負わせることができないならば社会側の責任は大きい。なれば、すでに行動障がいを負ってしまった方々へは社会側の責任において最大限の最善の支援が提供されるべき。また、これからは、しっかり予防が施されることで行動障がいを生まない社会を作っていかなければならない。」(趣意)

⇒これは、約30年前、とある学会発表原稿にて私が掲げた大風呂敷。

あれから30年

- 行動障がい支援は、強度行動障がい者支援研修が国の主導のもとたくさん実施されて**受講者数はかなりの人数**に及ぶ。

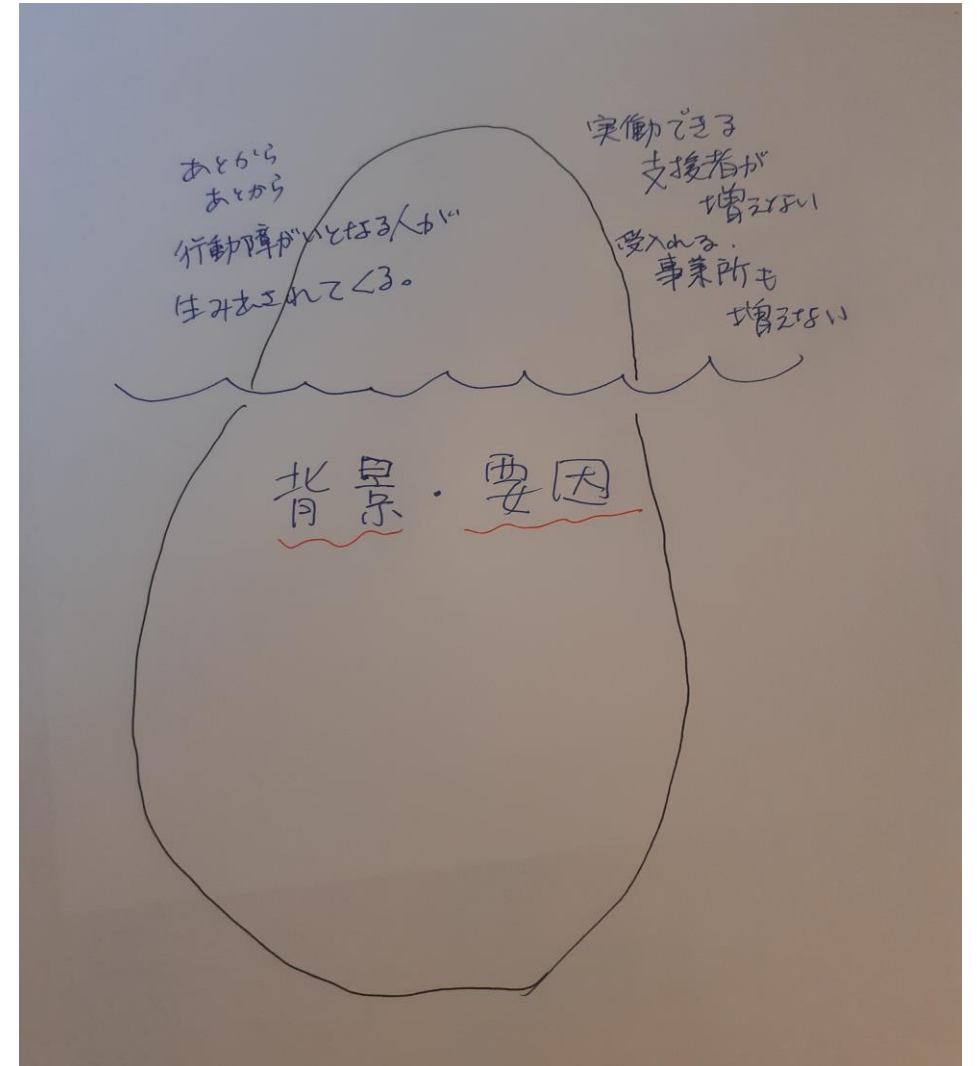
⇒なのに、行動援護事業所は一向に増えず、従事するヘルパーも少ないまま。日中サービスや短期入所等の受け入れ先も乏しく希望しても利用が難しい現状。

- 行動障がいに対処困難となる児童があとからあとから次々に相変わらず生まれている。予防が一向に進んでいない現状。
- **30年間ほとんど変わっていない。**
- **いったい何をやってきたのか？**

社会的視点の冰山モデルで考える

- 研修受講者は増えても実支援を担う支援体制が整わない背景、水面下の課題は何か？
- 次々に行動障がいの人が生み出されてしまう背景、水面下の課題は何か？

⇒この課題にメスを入れなければ、現状はなかなか変わっていかないのではないか？



支援者レベルの問題

- 怪我が心配。怖い。失敗したらどうしよう。自信がない。
- どうしても制止せざるを得ない場合どうしたら？等の**不安感**

⇒ 誰しも最初は自信がない。**わかる人に教えてもらおう。**

(OJT・SV) (ゆうゆうセンター機関コンサルテーション)

⇒ 一人で抱え込まない。抱え込ませない。**チームアプローチ。**

⇒ (私から) **苦しみに気付く感性**。わからなくて当たり前だが、**ABA等はわかるために学ぶ必要**。人に聞けばよい。
仲間と一緒に。チャレンジは**腹をくくって**。
失敗も覚悟だけど**勝算あるチャレンジ**で成功体験。
展開予想して安全確保することで心にゆとり。

⇒ **お互いに良い体験ができれば、安心と信頼につながっていく。**

「イヤだあ〜」 ⇒ 「わかったあ〜」へ

- 不安・心配・不信感＝派手な行動で表現
- 安心し、本人の気持ちに向かないとうまくいかない。
- 本人の心を押し量るためのツール。
(スキヤタープロット・MAS・ABC分析等)
- 気持ちが伝わる安心。
- 心がわかれば、やりとりができるようになる可能性。
⇒代替行動等、PBS（ポジティブ行動支援）へ
- わかりあえれば、行動問題を起こす必要がなくなる。

支援者を暖かく育てる

- ⇒ **支援者をバックアップし支援するしくみ**の必要性。
- ⇒ 行動障がい支援に携わってくれる人は希少。関わってくれる支援者を大切に。つぶさないこと。
- 行動障がい支援は高い専門性を要求される支援であるがゆえに高度な要求を求めてしまう。失敗を責められることで自信を無くし支援意欲を低めてしまう。細やかな親の配慮には及ばない。同等の要求を浴びせてつぶさないこと。いきなりエキスパートは無理。時間がかかる。
- チャレンジしてくれる人をもっと増やしたい。しっかり励まし支える。もっとおおらかに育てていき、**わかりあえる仲間をふやす**。

社会資源の視点から

- 事業所に支援依頼しても、受け容れる環境が用意できない、人材が居ない、人手がないと断られることが多い。
 - ⇒できない理由はあげればいくらでもあげられる。
 - できるための提案**に至らず済まされている。
 - ⇒環境、人手、人材など、十分な検討はなされたのか？（先述の子どもの側に立った最善の利益追求が為されたか？に通ずる）
 - ⇒**どう努力しても用意できない地域社会なら、社会システムそのものの欠陥や不備の疑い。（正に地域課題）**
 - ⇒自立支援協議会の役割

二次障がい（予防可能）という視点で考えたら

- 「強度行動障がい」に限った社会課題ではない気がする。
 - 外部に、安心できる場所、信頼できる人、認めてくれる人に出会えなかったという点でくくれば・・・
 - 「不登校」、「引きこもり」、「いじめ」なども同じような理由が考えられる。（参考：立花高校の校長先生の実践）
 - 安心できる場所があり、信頼できる人・認めてくれる人がそこにいたら、そうならずに済んだかも。
 - 相談員や支援者が困難事例に出会うたびによく思う事。もっと早く良い支援者と出会っていたら。出会えない社会側の問題かもしれない。
- ⇒ 当事者たちが社会に変革を訴えていると捉えられないか？

そして私の妄想（提言）に至る。

- その気になれば、近い将来には叶えられそうな提言
- 実現がほぼ無理であろうけど将来的な妄想（理想論）

その気になれば近い将来には叶えられそうな提言 1

①**学校担当教師へのサポート体制**の確立（S V・チーム・ケース検討・一教師でなく学校としての連帯）（支援部の充実）（担当教師を孤立やクレームから守るためにも）ちょうど思春期にさしかかる学校時代に行動障がいが増加する傾向がある現実を踏まえて。いわゆる当たりはずれの解消も。

②**教育・医療・福祉間の縦割りの狭間の問題を協議する連絡協議会**の設置（現場で解決できないケースについて、それぞれの部署の決定権のある担当者が集い、ケースの問題を協議して役割を調整して分担する）（学校長の裁量で止まってしまうケース等、責任転嫁ばかり他を責め合っても何の助けにもならない。児童相談所・教育行政・福祉行政の課長級以上の権限行使できる立場の人が集い、問題解決を責任をもって話し合う）

実現がほぼ無理だろうけど将来的な妄想提言（理想論）

- 行政はどこも結局はたらい回し。（失礼！）
今の縦割り行政の範疇で考えていては埒があかないとの見切り。
 - 中でも教育分野への期待が大きく、第一番に教育制度そのものの改変が必要との結論。
 - 多様性の尊重と言いつつ、システムの限界として小手先のししか尊重されない現行の伝統的な富国強兵的思考をもととした考えを断念。⇒一人一人の尊厳を基底において一人一人が最大限に尊重され、認められ、活躍できる教育へと根本的に改変する。
- ⇒ **「生活学校」と「好きな事学校」の二本立てに。**

生活学校の概要

目的

- 個々の能力や特性に応じ、真に生活に最低限必要な知識や技能を身につけ、自分の能力を最大限に発揮して自立した生活ができるようにする。
- 地域社会で受け入れられ、安心して生活できることを目指す。
- 家庭や地域の教育力の低下、ネットなどの情報の影響を考慮した教育。

⇒ **一人一人に合った**個別または小集団教育により、**自助と共助の両方の力を最大限に高める。**

生活学校（小学部）

• 日常生活スキルの習得

- 買い物、自炊、掃除・洗濯、ゴミ出し、入浴などの基本的な生活能力。
- 衣服の選択（気候や趣向に応じた適切な選び方）。
- お小遣い帳。仕事と報酬の関係。
- 交通機関やレジャー施設の使い方など。

• 社会性の育成

- 赤ちゃんやお年寄りのお世話を通じた育児・介護経験。
- 卒業したら誰もが地域のボランティアを担える。
- これらの経験が将来の児童虐待予防等につながる可能性。

生活学校（中学部）

• 社会的スキルと知識の習得

- 金銭管理（価格の違い、予算内での計画的なやりくり）。
- 非常時の避難行動、相談機関の利用方法。
- 役所での手続き、税金・健康保険・年金の基本知識。
- 詐欺や消費者被害への対応策。金融の知識。（借金の意味等）
- 恋愛や結婚・出産育児。 • SNS等の使い方やリスク。

• 社会との関わり

- 仕事や収入の重要性、地域の人との交流方法。
- 虐待の世代間連鎖を断ち切るべく数世代を経て問題の減少効果を期待。

好きな事学校の概要

目的

- 一人一人の興味関心や特性に合わせ、好きなことを楽しみ、極めることを目指す。
- 生涯にわたる職業選択やライフワーク、生きがいを見つけ、育てることを想定。

特徴

- 自由な選択。学びたい内容を自由に選び、嫌いなことを無理に学ばされることはない。
- 飛び級も認め、好きなことをいくらでも極められる環境を提供。
- 優劣をつける点数評価や比較相対評価は一切行わない。
- 将来の就職先選抜に向けた適性評価が可能。

二本立てで期待される効果

- 2つの異なった特色の学校がそれぞれ機能すれば、行動障がいや不登校といったケースが減り、能力に応じて活躍できる人が増え、社会に出て生活や仕事に困るひとが減ることが期待でき、ひいては、
 - ⇒精神保健医療の対象となる人が少なくなるかも。（医療費削減）
 - ⇒自己破産や詐欺の被害に遭うひとも減るかも。（困窮被害予防）
 - ⇒適職を得て税金を納め社会参加できる人が増えるかも。（税込増）
 - ⇒育児介護に熟練して児童虐待や高齢者虐待も減るかも。（虐待防止）
 - ⇒自助共助の力が最大限に高まることで**専門的で高度な支援を要するひとたちに集中的に予算を振り分けられる**ようになり、従事する**支援者にも手厚い待遇を用意し人材確保につながる**可能性が出てくるかもしれない。
 - ⇒**非行や事件が減り社会の平和と安定を図れる**ようになるかもしれない。

余談

【誰もが尊重される社会の実現に向けて】

問題提起

- 行動障がいや引きこもり等の問題は、個人の問題ではなく、尊重されず排除されてしまう社会側の問題ではないか。
- 「お金を生まない人は評価されない」価値観が根底にあり、ジェンダーの問題を含む多くの課題を孕んでいる。

現代社会の矛盾

- 価値観の多様性やノーマライゼーションが叫ばれるが、現実社会は「生産性」や「国際競争力」を重視する価値観に依存している。
- 家庭内での無償の奉仕（母親の役割など）が社会的に評価されず、保育・介護等の福祉の仕事の社会的評価が低いことの背景かも。

さらに提言

- 「生産性が低くお金にならないが、かけがえのない大切なもの」に最大限の価値を置くべき。
- 誰かの善意や献身に依存する構造を見直し、生命尊厳や人権尊重の思想こそを社会の基調に根付かせる。

最後に

- **強度行動障がい支援は“安心と信頼”という支援の根幹を教えてください、私たちの人間性を鍛えてくれる、一人一人が大切にされない今の社会の様々な矛盾を教えてください。**
- ⇒ 強度行動障がいの支援は、一人一人が認められ大切にされる生命尊厳の追求と言い換えることもできる。
- ⇒ 大げさかもしれないが、すべての人が心から生命尊厳の視座に立てる世の中は紛争解決に戦争を選択できないはず。同じ生命尊厳の課題をもつ仲間たちと協働して、声をあげ発信していくことが世界平和にもつながるような気がする。

目の前の一人への支援だけど世界平和に通じる壮大な仕事。

妄想にもお付き合いいただき、
ご清聴誠にありがとうございました。